文化たまの

令和５年度 玉野市文化協会表彰状贈呈式

開催日：令和５年11月３日

場　所：玉野市立図書館・中央公民館

玉野市文化協会では、毎年「文化の日」に、本市の芸術・文化の発展に著しく貢献した方に、表彰状を贈呈しています。

今年度はペン字部、陶芸部、俳句部、華道部、茶道部、日本画部から推薦された６名の方が受賞されました。

第　27　号

令和５年12月20日
編集・発行

玉野市文化協会

〒706-8510
玉野市宇野１丁目27番１号
玉野市教育委員会社会教育課内
TEL（0863）32－5577
FAX（0863）32－1329

書画・創作

洋画

第二の人生を楽しもう

大澤　明子

私と絵との出会いは、M氏の個展を見に行ったことがきっかけでした。自分も第二の人生で好きな絵を描いていたいとの思いから、M氏のアトリエを訪れました。仕事や子育てで日々追われる中、「忙しいからこそ時間を上手に使うべきだ」「継続は力なり」と励まされ、中央の美術展に大作を出し続けてきました。東京ではたくさん刺激を受けました。「自分が納得した絵が描きたい」また「少しでも上達したい」との思いで毎日キャンバスに向かって描いています。

最近定年を迎え、第二の人生を楽しもうと新たに決意しました。健康に過ごすためにプール・体操教室・スポーツジム・五千歩歩く・旅行・その他の趣味を楽しむ。

今まで自分を支えてくれた人達に感謝し、おいくつになられても元気で素敵な絵を描かれている方々を目標として、私も描き続けていきたいです。

第67回新世紀展「海の中　街並み　2023 I」

書道

私とかな書道

木村　勢津子

私が書道に興味を持ったのは、年賀状を毛筆で書きたいとの気持ちからでした。毎月の作品制作や展覧会への出品を励みに練習をしています。筆を持つ時は無心になれます。また、墨の香りが大好きで、岡林師葉先生の流れる様な美しい字を見て感動し、少しでも近づきたいと続けてきて四十年あまりになります。

最近は年賀状も手書きが少なくなりましたが、毎年毛筆で書く事を楽しみにしています。

書道を続けてこられたのも、師葉先生のご指導とご助言があったからと深く感謝しています。

中国には「墨には五彩あり」という言葉があります。「濃・焦・重・淡・清」の五種類の色です。また、墨の種類は青墨、茶墨などがあり、見る人の想像力で様々な色が感じとれる魅力があり、ますます書道が好きになりました。

これからも田井の教室で、皆さんと一緒に書く喜びを感じながら学んでいきたいと思っています。

ペン字

玉野市文化祭 硬筆展書道展を終えて

平井　杏苑

昨年の十二月一日から四日までの四日間、玉野市立中央公民館ギャラリーにて玉野市文化祭硬筆書道展を開催いたしました。

硬筆書道各会の試みで各教室の子供達の作品も多数出品され、例年にない賑やかな作品展となりました。

練達の先生方の作品の前で足を止め、肉筆の素晴らしさに感動し、子供達の素直な作品に元気をもらいました。

筆具外の割りばし、絵筆などを用いて工夫を凝らしたカラフルな作品は遊び心を感じます。

お陰様で、コロナ禍にも関わらず、子供から大人までたくさんの方々にご来場いただきました。

最後になりましたが、玉野市の文化活動が一層繁栄されることを願っています。

表装文化

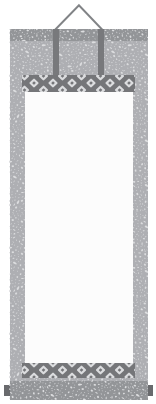
大賀　美緒

教室に通いはじめて二年が経ちました。様々な芸術文化をたしなむ方々と交流でき、多様な技術や構想に触れる機会ができました。

私はまだ経験の浅い若輩者なので、ハケや作品に合わせる裂（キレ）などをイメージどおりに扱うことが非常に難しいと感じています。普段の生活で何気なく目にしている直角や平行であっても、手作業でパーツを合わせる際にはかなり神経を使います。でも「自分がしたようにしかならない」という手作業ならではの自己責任は、反省と共に大きな達成感にも繋がります。

道具や素材を使いこなし、趣ある作品を次々に完成させる先輩方を見ていると、「いつか私もあんな風に良いものを作れるようになりたい」とハケを持つ手にも力が入ります。

昔の人が描いた作品に新たな息吹を吹き込むことのできる、表装という営みにはとても大きなやりがいを感じています。



日本画

岡野　収

墨を擦り、顔彩を並べ、画仙紙を拡げる。かねて描こうとしたものを、筆に墨を含ませて一気に、やってみる。形が見えたら大き目の刷毛に顔彩の皿から多種の色を付けて、すぐに片方に水を含ませて紙の意とするところに押しつける。墨の線に掛かっても外れても、押しつけたり引いたりしながら刷毛に宿った色が勝手に踊り出し墨も交じって紙面に詩情を作り出す・・・・・・・

と言うように行かないのが、長く絵を描いている所以かも知れない。逆にどうなるか、どんな絵になるか、どきどきしながら紙に向かう。どうなるかを夢見て筆を進める。楽しく、また嬉しさのようなものまで存在する。

絵を楽しみ、みんなでどきどきしながら自分の絵に向かう。他人様に関係なく、自分のよしとする

絵を作る。意としてもまぐれでも自分の好きなものを作る。
認知症が廊下の向こうに立って此方を見ている。

写真

清水　孝之

文化協会写真部は、現在十二人の会員で活動しています。部として月一度の勉強会を図書館の研修室で行っています。三点ずつ提出して外部の講師に評価を依頼し、送付された講師の録音テープを聞きながら、ボードに貼り出した写真一枚ずつを皆でチェック鑑賞することとしています。

写真撮影は個人で出かけたり、会や、外部の撮影会にも参加したりします。対象は身近な花や鳥動物・自然・行事・人物スナップなどです。外部の各種コンテストで賞をねらい公に評価してもらう機会も多々あります。写真を展示して見てもらう場としては、会員だけの作品を五点ずつ展示する支部写真展を春に、一般の方の写真を広く公募し、二点ずつを展示する市民公募写真展を秋に図書館のギャラリーで開催しています。

写真は生涯学習文化活動として身体を動かし頭を使うということで健康・ボケ防止にも良いかと思われますが、会員の高齢化も進み、新規の加入者がなかなかいないのが悩みです。

茶華道

茶道

竹内　範子（宗範）

平成二十五年より茶道連盟会に参加させていただき、二十七年三月に初めての文化協会茶道部月釜の席主を担当しました。来席の皆様にゆったりとした楽しいひと時を、と心掛け以来早いもので十年近くとなりました。二年に一度の月釜担当と、コロナ禍ならではの「お茶のあり方」など会員の皆さんと模索した事など様々な良い経験をさせて頂きました。

今までに三回の月釜担当、そして六年三月には四回目を予定して苦心していますが、玉野市の茶道愛好家の皆さんに「今度はどのように楽しんでいただけるか・・・」と自分なりに考えることが、私自身の最大の楽しみとなっています。

実は、母の長姉が玉野市に住んでいて、子どもの頃に両親姉妹で揃って遊びに来ていた思い出のある玉野との縁に驚いています。私の高校に茶道部があり、迷わず入部しました。父方の伯母と父が茶道をしていた事も決断の理由です。

あれからお稽古も五十数年になりました。お茶席での立居振る舞いと、流れる様な無駄の無い所作など、今思えば「今の私の原点はそこにあったか！」と思えます。

玉野市民の皆さんと共にお茶席で楽しいひと時を持てることが、私にとって本当に楽しく嬉しい限りの時間です。

華道

日々の暮らしに花を…

徳田　睦子

華道部は年次行事として、中央公民館のギャラリーにて秋季華道展を開催しました。

テーマは「秋麗」とし、八流派が色とりどりの季節の花々を個性豊かに組み合わせて生け、皆様に少しでも明るく幸せな気分を感じて頂けたと思っております。

また、毎年恒例で、市役所ロビーに各流派役員がボランティアで毎週交替で季節の花を楽しみながら生けております。

市役所にご用でお越しの折りには、ちょっと花を眺めていただき、束の間、幸せな気分になっていただけたらと思います。

音楽

邦楽

三年ぶりの演奏会

青井　泰則

昨年の十一月十三日コロナ禍で開催を中止していた邦楽演奏会を三年ぶりに開催することができました。しかし、ご来場の皆様や出演者に感染対策というご不便をかけながらの開催となりました。今年は色々な制約なしに開催できることを願うばかりです。

コロナ禍前の演奏会は、玉野市市民会館で開催していましたが、市民会館も取り壊され、昨年は新たな会場をお借りしての再スタートとなりました。玉野市に大人数での演奏も可能で、大勢のお客様にお越しいただける新しいホールが玉野市に建設されますことを切に望みます。

最後に、今年は第六十五回の演奏会になります。園児・小中学生から高齢者まで幅広い邦楽愛好家による箏、三絃、尺八の演奏を楽しんでいただければ幸いです。

管弦楽

岡　幸代

玉野フィルハーモニー管弦楽団は、月に二回、日曜日の午後にそれぞれが担当する楽器を持って集まり、合奏練習を行っています。オーケストラには様々な種類の楽器があり、それぞれの持つ音色も個々に魅力的です。一人で演奏することも楽しいですが、仲間やいろいろな音色の楽器と合わせて一つの曲を演奏することはもっと素晴らしく、楽しさ倍増です。

そんな楽しい音楽活動にも数年前からコロナ禍の影響もあり、先の見えない演奏会の延期や中止を余儀なくされ、目に見えない不安との戦いの日が続きました。しかし、昨年からようやく明るい兆しが見えはじめ、待ち望んだ演奏会を再開させることが叶いました。度重なる延期を経て、二年越しに市制八〇周年記念の「はじめての第九たまの」が開催され、その年

の十二月には、二年振りの定期演奏会が、そして今年の五月には二度目の「第九」が開催されました。

現在は、年に一度の定期演奏会に向けて日々地道な努力を積み重ねているところです。

ギター・マンドリン

中田　美千代

昭和二十七年から一度も途切れることなく定期演奏会を開いてきましたが、コロナ禍の二年間は残念ながら中止となりました。ようやく昨年再開でき、今年は十月一日に第五十二回定期演奏会を荘内市民センターのホールで開催しました。「広報たまの」や新聞にも掲載してくださり、会場はお客様で満席でした。これまで長い間支援してくださった関係者の方々、また家族のお陰と深く感謝しています。

長い年月の間には山あり谷あり・・・。クラブが消滅するのではないかと思った時もありましたが、問題がある度にクラブ員皆が危機を救おうと頑張りました。根っからの音楽好きが皆と音を合わせることによって、一層の結束ができ、今に至っています。

音楽とは〝音〟を楽しむこと。「おんがく」の〝く〟が苦しみの〝く〟になってはいけない！これがクラブ員全員の思いです。これからも合奏を楽しみ、幸せを感じながら練習や交流を続けていきたいと思います。

玉野太鼓

廣畑　武史

備前玉野太鼓は、昭和五十六年十月に結成された和太鼓チームです。

高松と玉野に挟まれた海域を備讃瀬戸と呼び、鯛や鰆の漁場として古くから有名でした。この漁場は、備前と讃岐の漁民がひしめき合い、激しい魚場争いを繰り返していました。そこで一人の漁師が古くから変わることなく流れている潮の流れに樽をのせ、その流れついたところを境界と決めたらどうかと提案し、漁師達により樽は流されました。備前玉野太鼓は玉野市の伝説、大槌樽流しを表現した全国的にも珍しい樽太鼓として誕生しました。

現在は、小学生から大人まで、幅広い年齢層の十一名が活動しています。今年も新年には、メルカのセントラルコートで新年和太鼓演奏会として演奏しました。その他、各地区のまつりやイベントなど依頼を受け、演奏しています。地域に根付いた和太鼓チームとして伝統を守りながら今後も活動していきます。

舞台芸術

民踊

植田　寿子

私達民踊部は岡山県日本民踊協会に属し、協会行事にはよく参加しています。

今年の八月には、熊本県の山鹿千人灯ろうまつりに参加して千人の中で踊ってきました。また、九月には、徳島県で開催された全国レクリエーション大会に参加して岡山県民踊の「やとさ踊り」を踊ってきました。来年は、栃木県で開催されます。こうした行事に参加することは日頃の民踊の集まりの刺激となり、楽しみも倍増します。年二回の全国講習会で発表される曲を県内講習で伝達し、それをさらに各団体へ伝達していきながら日本全国の民踊を伝承、普及しております。

現在、私どもは毎年十一月の最後の日曜日に開催している〝民踊交流会〟に向けて練習を重ねております。一年間の練習の成果を発表する場として会員一同頑張っております。

文芸

俳句

継続は力

立花　正廣

県外の職場で定年を迎え、玉野にUターンしました。年金暮らしの第二の人生は、戴いた自由時間を快適に過ごすため、中央公民館の定期講座に注目し、毎年新しい講座に挑戦してきました。そのひとつが俳句の定期講座で、立石せつ子講師（当時）に手解きを受けましたが、季語と文語に加え難解な漢字にと、講座生のレベルについて行けぬ落ちこぼれでした。

熱しやすく冷めやすい質の自分ですが、温厚な十河朴風講師（現）の丁寧な指導と的確な添削にいつも感銘しながら十数年を迎えることができました。

俳句仲間との真摯な会話も自分にとっては大きな財産です。四苦八苦するなかで、ユニークな句だと励まされ、調子に乗って秋の俳句大会に出した句が、思いもよらず入選したことがありました。「諦めずに継続して良かった」とその時の感動は今でも思い出します。

最近は体調を崩し健康の有り難さを痛感しています。もっと若い頃から俳句に接していたらと思う昨今ですが、十七音字に新鮮さと感動を表現出来るように「他人の気づかぬ発見」「二物の新しい取り合わせ」「ハッとしてハッとさせる」俳句に挑戦していきたいと思っています。

川柳

仲間の作品鑑賞

山本　菜津子

ハーレーにもポルシェにもある悩みごと

きりこ

たとえば「人間ならだれにでもある悩みごと」と言う句を作ったなら、たぶん没句だったでしょう。それとは同じ意味の句を、しかも車に託して作句。ユーモアと説得力が生まれ、佳句になったと思います。

名器だがお茶が酒には変わらない

一石

お気に入りの湯飲呑でお茶を飲むとおいしいと思うが、この句のようなことは一度も思ったことはない。「お茶がお酒に変わるなら」とはなんだかクスリと笑えるけれど、一石さんのお酒への愛をしみじみと感じることができた。

神様は山の彼方に住むという　かぎう

かぎうさんの神様は山の彼方に住んでいて、気が向くとてっぺんからかぎうさんを見守ってくれているのでしょう。忘れ去って居た詩を思い出させてくれました。「山のあなたの空遠く幸い住むと人のいう・・・」

短歌

短歌を楽しむ

道廣　睦子

私と和歌の出会いは小学校六年生の時、初めて知った百人一首です。

五七五七七のリズムというか流れの美しい和歌が大好きになりました。仕事に就いてからも、車に乗った時は独りなので、声を出して朗読しながら楽しむ日々でした。

仕事を退職したら短歌を始めようと思っていた私は、玉野市立中央公民館で短歌会があることを知り、早速入会し三年が経過しました。

月一回の短歌会はとても楽しく過ごさせていただいています。歌歴の長い井関古都路さんを中心に、各自が二首作り持参したものを、特に初心者には丁寧に添削していただきながら、または他のメンバーの詠草について本人からの説明を聞き、みんなで意見を出し合いながら進行してゆきます。そのプロセスがとても楽しく、笑いがあり、学びがあり、そして好ましい短歌に変身していくのがとても嬉しく二時間があっという間に過ぎてゆきます。

短歌部の平均年齢は少し高いですが、精神年齢は若くて皆さんがそれぞれ輝いています。

退職されたばかりの若い方、会の仲間と同年代の方、一緒に楽しみませんか。

最近の歌会で、私の心に残った短歌を紹介します。

後ろから曾孫を抱けば振り返り
反り返りしてわが顔を見る
多恵子

風の吹くよし簀に縋るかまきりに
叩きつけ降る真昼の驟雨
朋子

花うつぎ狂ひ咲きたる夏の夜を
頬痩せてあふぐ緋のアンターレス
古都路

山野草

玉野山野草の会への思い

谷岡　清志

玉野山野草の会は昭和五十九年（一九八四年）春に会員数二十一名で発足し、以来春・秋の展示会を現永井会長、会員始め諸先輩方の努力により今日まで継続してまいりました。しかし、近年は会員の高齢化による会員数の減少（出品数の減少）と、地球温暖化に伴う夏場の屋外での山野草を育成する環境が厳しい状況となっています。

会として、この二つを克服するため先ず、入会し易いイメージ創りとして、春・秋の展示会において水石、水盤・駄鉢可など、体裁にこだわらない展示とし、観覧し

て頂く方々に当会へ一層興味を持って頂ける方法に改革して、会員増加を期待しているところです。

秋の展示品は、猛暑の夏超しは必須です。強い陽ざし、猛暑対策として新たな遮光ネット、水持ち水はけの良い育成土の研究、水やり方法等、会員相互で知恵を出し合い、素晴らしい展示会を成功させて、会の継続を図って行きたいと思っています。

お知らせ

陶芸

第八十二回玉野陶芸同好会作品展

日程／令和四年十一月十六日（水）～二十日（日）

第八十三回玉野陶芸同好会作品展

日程／令和五年五月十七日（水）～二十一日（日）

場所／中央公民館　ギャラリー

右記日程にて作品展を開催し、たくさんの方にご来場いただきました。

第八十二回の様子

吹奏楽

玉野ウインドオーケストラ
第三十六回定期演奏会

日程／令和五年六月十一日（日）

場所／岡山市灘崎文化センター

A．マルケス作曲「Danzon No．2」や朝ドラ「舞い上がれ！」主題歌『アイラブユー』などを演奏し、未就学のお子さんからご高齢の方まで約四百名の方に来場いただき、演奏を楽しんでいただきました。

俳句

玉野市俳句連盟
第四十七回秋季俳句大会

日程／令和五年十月八日（日）

場所／中央公民館第一・二研修室

右記日程にて大会を実施しました。当日句及び募集句の受賞句を報告させて頂きます。

○募集句　令和五年八月三十一日締切、応募者三十一名、応募総数九十三句、連盟役員・理事による事前選句と集計を令和五年九月三十日に実施し、次のとおり表彰しました。

【受賞句】

市長賞

一灯を妻と頒ちし良夜かな　十河朴風

連盟賞

炎天の風に地球の匂ひあり　久保　静子

学童は島の宝や雲の峰　立花　正廣

入選賞

人は皆生きる先生空高し　植野　勇

逆さ蒜山踏んで代田の始まれり　立石　はるか

黙想の家ことのほか蝉時雨　井上　久仁

免許状もつてゐるかと凄(すご)む河豚(ふぐ)　西上　みどり

ラムネのむ今浄土への途中です　金石　きみ子

つる引けば畑一枚動きだす　上杉　良子

天と地をまあるく包み芋の露　立石　直国

○当日句　参加者十九名、当日投句で各人三句（当期雑詠）総数五十七句、選句は参加者が七句互選し、次のとおり表彰しました。

【受賞句】

議長賞

木に木霊(こだま)人に言霊(ことだま)秋澄めり　十河　朴風

連盟賞

聞き流すことも手の内秋うらら　立花　正廣

天命と知るや知らずや法師蝉　那須　澄雄

入選賞

秋深し今を楽しみ今を生き　植野　勇

宍道湖(しんじこ)の鱸(すずき)奉書に畏まる　立石　はるか

鶏頭の夕日を呑みて異界めき　滝　公華

それぞれに一病ありて萩の宿　金石　きみ子

もう後は風に任せて散る紅葉　立石　直国

来し方も途切れ途切れや秋の蝶　長畦　恭子

ノーベルの爆破の欠片鰯雲　三好　一彦

合唱

第二十八回玉野合唱祭

日程／令和五年十月二十九日（日）

場所／荘内市民センター　多目的ホール

上記日程にて玉野合唱祭が開催され文化協会合唱部からは玉野市民女声合唱団、ささゆり合唱団、夕なぎコーラスの三団体が出演しました。

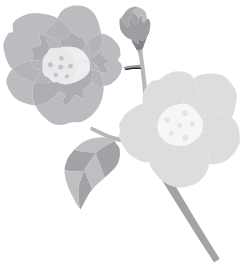
文化協会表彰

令和五年度の文化協会表彰状贈呈式を、十一月三日に中央公民館で、来賓に市長・市議会議長・教育長をお迎えして行いました。

この贈呈式は今年で四十七回を迎え、本年度は次の六名の方々に、文化協会の発展に多大な功績があったとして、表彰状と記念品を贈呈しました。

高原　洋子　　ペン字
伊藤　硬三　　陶　芸
木村　典子　　俳　句
井上　里美　　華　道
中村　郁子　　茶　道
谷　タツコ　　日本画

（敬称略）



文化協会被表彰者

ペン字部　高原　洋子（掬泉）

この度は、玉野市文化協会より表彰いただきまして誠にありがとうございます。

高畑和耕先生、翠岑先生に師事して三十年余りになります。心のこもったきめ細やかなご指導のおかげで、今日に至ることができました。

長く続けていますと、時になかなか思うようにペンが進まない事もあります。そんな時は、日本や中国の書蹟を手に取ります。その躍動感あふれる美しい文字から、書家の人物像、時代背景に思いを馳せるうちに不思議と「さぁ書こう！」という気持ちが湧いて来るのです。

ペン字に長年真摯に向き合って来られた師匠に倣い、これからも倦まず弛まず続けていこうとあらためて思っております。

陶芸部　伊藤　硬三

私は街の小さな鉄工所の六男に生まれて、物作りが大好きな性格が創られ、今でも日曜大工や野菜作りが大好きです。物作りは小生の大事な宝物です。この度の表彰は非常に有り難い事です。

陶芸作品は物作りの基で何の形も無い粘土から創りあげ、自分の造形趣味の表現とします。しかし、この年齢になると、お茶椀、湯呑、お皿等は不要になり、生前整理の対象です。試行錯誤の末に、日本最古の縄文や弥生の土偶や壺なら面白いと思い挑戦させてもらっています。当時の人達が何の目的で創っていたのか、その人達の気持ちを理解できたらと思い、やってみようと挑戦しています。

俳句部　木村　典子

この度は玉野市文化協会より表彰を賜り、身に余る光栄で誠にありがとうございます。

俳句を始めるきっかけは、還暦も近づいた年齢で動けなくても出来る趣味は無いかと思案中の折に、店のお客様が会話の中で趣味の俳句について熱心に本当に楽しそうに話され、お誘いを受けた勢いと興味本位から句会「山」に入会するご縁を戴きました。

十河朴風先生、先輩方が暖かく迎え入れてくださり、先生のご指導で俳句の初歩から俳句の魅力を解りやすくご指導戴きました。また、先輩方が重ねて来られた人生経験に溢れるお話しやら句作を通して人との出会いを改めて噛み締める機会となり、仕事との切り替えが出来るひと時になりました。また、第二の故郷玉野が大好きになりました。

人生では紆余曲折がありますが、

俳句を通し育てて戴いたお陰で今日があります。諸先生はじめ先輩の方々や句友の皆様に深く感謝致します。

メンバーの高齢化に伴い句会「山」が解散されたことは残念でしたが、句会「あすなろ」に加わり新たな句友との出会いを賜りました。俳句の基本をもう一度勉強し直すために玉野市俳句講座でのご指導を戴き、二十五名の句友と切磋琢磨しています。

華道部　井上　里美

この度は玉野市文化協会より表彰して頂きまして誠にありがとうございます。また、今までご指導くださいました諸先生方、会員の皆様にも心より感謝申し上げます。

私は草月流の師範である主人の母に師事し、華展、市役所ロビーへの展示、週に一度のお稽古を二十数年重ねて参りました。季節により花材は違えどその花木の一輪一枝に触れる度に背筋がスッと伸びて、自由に自分らしくお花を生ける事の楽しさを日々学んでおります。

花のある風景は心も日々の暮らしも豊かにしてくれます。そんな生け花の発展と普及に少しでもお役に立てる事ができればと思っておりますので、今後ともよろしくお願い致します。

茶道部　中村　郁子（宗郁）

この度、玉野市文化協会表彰をしていただきありがとうございました。この受賞から自分の思いを振り返ってみました。

私は十八歳から茶道に入門し、今まで続けてこられたのは、この道が心の拠り所となっていたからです。その中で気心の知れた友人も増えて楽しい日々を送ることができていました。

思えば、幹事長を受けて間もなく、コロナの問題でいろいろと制限され、活動が困難になり、その都度、仲間みんなで対処しながら乗り越えて参りました。「我慢を踏み出す勇気」でした。この貴重な体験は大事にしたい一つとなりました。

これからも自分の茶道は裏千家鵬雲斎大宗匠の「一盌からピースフルネス」のおことばを実践しながら、先駆者、諸先輩、から教わった精神を忘れず、感謝しながら、過ごしていきたいと思っています。

日本画部　谷　タツコ

今回の受賞に大変驚いています。そして、心より御礼申し上げます。

三十五年前、中央公民館での水墨画講座で、今は亡き近藤先生に厳しくご指導頂き、その後水墨サークルでの教えを学びました。近藤先生に出会えた事、また水墨サークルの良き仲間に出会った事に感謝いたしております。

玉野市文化協会、中央公民館（文化センター）関係者の皆様には、水墨画活動、環境整備等にご支援いただき心より御礼申し上げます。

これからもサークルの仲間と共に歩んでいきたいと思います。

文化たまの編集委員

藤田　勲　山口　正
藤原多恵子　江田　康夫
関　真実　綱川　則枝
青井　泰則　日村　喬
細川　健二